

# 鳥語 61

2010

詩 評論 小説



鳥語社

# 鳥語 61

2010年12月15日

## 目次

### 詩

沈む街

ほか二篇

三浦玲子 2

空飛ぶ象

ほか三篇

鈴木茂正 8

五月の満月

ほか四篇

森甲子祝 14

### エッセイ

ドイツ悠悠

木下蘭子 75

### 小説

浪花逢坂

なには 西よさか

岩田孝子 26

赤絵の壺

左近育子 70

醇醪

でんり

中尾哲也 104

同人・会員住所録  
編集後記

130 103

# 沈む街

三浦玲子

遠いところで

ことばを交さないなつかしさで

ひとが立ち上る

それは

人気ない公園の日ぐれのベンチに

一羽の鳩を追ってやってきた

はずかしがり屋のあなたの

影？

また

遠いところで

今朝の雪を払うかすかな音がする

聞き覚えのあるあなたであってほしい

でも、もうおぼろなだけの

声？

わたしは

いちまいきりの冬の風景の外側から

溜息まじりに眺めている

遠いところへ

ずい分とおいところへ

わたしの影がつめたく藍色に伸びてゆく  
影の先で

なにかがさびしく跳ねている

人の最期の厳粛な語彙の連なりだ

眼の中に

ひとひらしみた

綿雪？

すげないあいのボーレイの、と

わたしは口ずさみ、後は何も言えずただ

口ずさみ

この両手に余る

ことばの一句一句は何ほどの意味もない

無為に生きてきたろうか

ああ

このまま睡ってしまおう いっそ

失意も過ぎてみれば美しい仕掛けと

おもえるのなら いっそ

街は巨大な

ボール・デルボーのひどくざわめく  
一枚の絵のようで

うすく危うい

陶器のかがやき

そのつめたさ

手袋を取って

片手を低く上げてみる

ものみな冬のさなかなり

＊ボール・デルボー

一八九七年ベルギー生まれ 画家

## アサガ才考

いつも探さない花だった

それを見つけたときの安堵感は

郷愁ともちがう

何だろう？

行き馴れた道を歩けば

どこにでもアサガオがあつた

ネコジャラシがまつさおに立ち上る

空き地や

夾竹桃がしだれる日盛りの川っ渚

家々の無口なドアの前の白いブランターに

消えそこねた夕べの星のように

咲いていたつけ

むすうに咲き乱れるのに

そのたたずまいのしずかなこと！

花卉は

やわらいだ木綿の手ざわりや

張りのある麻のしたしみもち

朝が一番似合っていた

ひとつが咲いて

あるかなしのちいさななぜを

花の周りにつくっているのに

そのひとつが凋むとき

またべつのかぜをいそいそと

花のくぼみにどうしたって送りこむのだ

ドンナ約束モ／ワタシハ忘レナイと

わらって

まるくゆるやかにくびれて  
さいごは萎れるだけの

でも

大事な刻<sup>とき</sup>をわきまえている  
生真面目だから

いつかも

青紫の空といわれ

月下のかれんな神ともいわれ

どこまでも胸さわぎにみち

ひみつまで守ろうとする

あやしさの？

あるいはすべての朝の墓標？

足早な歩行をひとたび止めて花を見る

ああ、咲いている。

くらしの満足ってこんなことだったのか  
と

なつかしげに――

\*千利休にあいされた

一輪のアサガオだ

\*千利休 茶人

# 私ト話シマセンカ

あかねさすそらのかすかな重みが  
さざなみ立った鳥の嘴を引きつける  
きょういちにち

鳥たちはゆつくり時間をかけて

弓なりのそらを

むしんに啄んだ

かぜを縁取ったそらに次々

むすうのちいさな窪みができる

その窪みにまたあたらしい夕陽が溜まる

鳥は満足げにもみじいろの足に力をこめる

夕陽を蹴散らして

そらのしーんとした奥行をたのしむ

鳥は叡智にみちたいきものだから

なまあたにかいからだは驚くほど従順で

時に大きく波うつて羽をひろげさげぶ

そらが汗ばむ

まぎらわしいコトバが削ぎとられたその時

対話がはじまる……

# 空飛ぶ象

鈴木茂生

九州の小さな町の

五人（だったか？）の

おじさんたちが

（電気屋さんだったり、スーパーの店長だったり）

それぞれの胸の中で鳴り響いてやまない

音楽に突き動かされて

アメリカのカーネギーホールまで出掛けて

自分たちのビートルズを演奏してしまう……

そんなお話を聞いたことがありますか？

小さな町の

小さな送別会もあったりして

それぞれの仕事も家庭も

ちよっとお休みにして

公演の前には

英語のレッスンの一夜漬けの特訓も受けて

カーネギーホールで一晩だけ歌う

ギターをかき鳴らす

タキシードを着て 蝶ネクタイをしめて

日本人のビートルズたちが  
臆面もなく自分たちのビートルズを歌う

発表の日にはどれだけたくさんの人が  
彼らの公演にかたずを飲んで

遠く海の向こうで演じられている

空飛ぶ象「フライング・エレファント」の演奏に  
聞き入っていたことだろう

家庭では

それぞれの奥さんや子供たち

役場や会社やお店の職場でも

彼らを知り励ましバカなやつらだと笑いながら

それでも彼らの音楽に耳を傾けてきた人々が

いま遠く海の向こうで演じられている

「フライング・エレファント」たちの演奏に

どれだけ遠く聞き耳を立てていたことだろう

好きなビートルズの音楽を

自分たちもカーネギーホールでやってみたいという  
たったそれだけのことなのに

# 梨をむく

梨をむいていて

四角に切り落として

残っている真ん中を

食べられるのではないかと

口に入れてみると

だんだん酸っぱくなってきた

食べられはするけれど

おいしくはない

四角に切り落としたやつを

皿に取り込んで

ふだんこうして食べていることに

気がついた

おいしい四角はだれのものなのだ

すっぱい四角は

だれのものでいいのかと

# 探しもの

見つからない

スタインベックが

ゾラが

シヨロホフが

モーパッサンもドライザーも

ウッズや

石川達三でさえ

「宮部みゆきなら

山ほどありますよ……」

店員に尋ねても分からない

知りません

どこかの奉安殿に

隠されているのではないか

それとも

いまもある

# 寸事

田舎の家の欄間の上に  
おなじ形をした写真のように

ずつと

並んでいるのではないか

ちよつとしたできもの

胃のへりに一センチほどのものが

検査・入院・検査・切り取り

検査・退院と

わたしの日常生活をゆさぶって過ぎる

なんとなく見つかつたそれは

七、八ミリのスコープを通してみれば

ただの浮腫

ほんの少し盛り上がって  
蚊に刺されたほどの腫れもの

怖いのはその下だよ

言われてみてもわたしにはわからない  
薄皮の下の粘膜のことは

スクリーンで見ても

何も見えない

ちよつと切り取って調べてみよう

ちよつと切り取られるのはわたしの胃

「生検」とやらにかけられて

深みのことがわかるのは少しあと

おめでとう！ なにもなかったですよ

高額請求書といつしよに

入退院門から送り出されるのは

ちよつぱりやせたわたしの体

とまどいつづけるわたしのころ

# 五月の満月

森 甲子祝

平成二十二年 さつき 五月

甲陽園

彼の子の邸から

仰ぎ見た 満月

甲板から 月空へ

吸い上げられるごとくであつた

月は 深更に向かつて

茄子紺の夜空を

自からの月光にまみれながら

移るともなく 移つていった

瞬間 瞬間 そこに在った

二晩 三晩

さつきの晴れた夜空を

月は 果ては照ることなく

擦るように 小さくなつて

涉つていった

# 眠り

亡き夫が

丸じるしをつけてゆきし

犀星さんの 詩を読む

本を閉じ

手を額に おいて

犀星さんと夫を

二人並べて

風呂敷を 被るがごとく

二人を 顔に乗せて

目をつむっている

夜 三時

# 残

夫の論文の

抜刷りの間から出てきた

一本の 毛髪

折り目に

かき消えてしまいそうな 五糧

夫の生体の

天恵か 名残 一毛

夫が

生きて在った事実を背負って

死と対峙している。

あるか なきかの

一 すじ 五糧

# 幸子

一たび 生れ出でし者の証しに

娘は 戒名を持つ者なり

墓 を持つ者なり

徒然草 四十九段

「古き墳

多くはこれ 少年の人なり」

とある

娘 昭和二十五年十月三日に生れ

昭和四十五年九月七日 没す

六十回目の誕生日の今日

その彼の母は

十九歳のままなる 娘の墓を

参らむとす

水と香と花を持ちて

大和の秋に 詣らむとす

首に 娘の父ならぬ

亡き夫の遺影を吊げて

まいらむとす

# 人影

彼の

人は

いずこに 去りしや

天が下

桃山町と宇治の原の

いずこの家庭に

帰りましたいしや

平成二十一年十一月 末

われ あてどなく 出でて

川沼に向う

十米先を

右より現れて

目前を横切りゆきし人

並みに 歩みて 事もなく

わが行く手を 横切つて

歩ゆみ去りし人のあり

あ 誰

誰か 誰ぞ

我が夫 亡き夫なりしよ

亡き夫に瓜二つ

面は おもて 見えねど

白い ハット

薄ベージュの 上衣

青い 綿ズボン

夫の姿で

夫の足並みで

夫の姿大で

夫の雰囲気で

夫の歩きかたで

後姿を残して

あゆみ去りし人

夫が

右から現れて

左へ去っていったのである

呆然としている間に

彼の人

忽ち 去って

行つてしまつたのである

一週間 経ぬれど

その彼の人は

目交まかひを離れない

去りゆく姿は

たしかに 亡き夫

なぜあの時 私に

後を追つて 従いて いなかったのか

葦に消えゆる人でありしか

沼に潜む人でありしか

宇治の巷に 暮す人でありしか

地を踏んで 道を進んで

彼の人は 事もなく

わが前を 遠ざかつてしまつた

面 かんばせは

一瞥だに 叶わざれども

夫を そこに据えるは

いかにも いかにも

容易であつた

彼の人は 去りぬ

永遠に 去りぬ  
杳として 去りぬ

二十日

一ヶ月

忘れかけしころ

再び 彼の人に

ゆき当てぬ

日暮れにかかり

それも 同じ時頃 私は

マンションを 出でて

あの場所にさしかかる

彼の人は

矢張り 右から現れて

わが面前を

左へ横切つて 通つた

眼を疑うのと

この偶然必然を

夫の業を信じるのとは

同時であつた

あつと足を止めるのと

彼の人の後を縦いてゆくのは  
同時であつた

五十米前を

彼の人は ゆく

帽子 プレザー スボン

歩幅 肩 足のはこび

全て

夫である そして速い

私は 息せききつて 縦いてゆく

間隔が大きくなる 私は半ば走る

アスファルトの沼中の大路を行き

なお進み その先で大路を右折し

直角に道を切つて

白いガードルの狭間を抜ける

沼に沿つて土をゆき

段を下つて 向う側へ

段を上る

それから、沼に沿つて堤防をゆく

木蔭をゆく 速い

堤防がつきると 樺の下を車道に出る

ユニ宇治のマンションが

樹木に包まれて 重なっている  
彼の人は

マンションの敷地に入ると

すぐ 右に曲った

曲つて 第一棟を 過ぎした

ああ この団地の人なりや

とは言え 彼の人は速い

堤防を離れれば

私の視野から 消えてしまう。

私は走る

走つて車道に出ると 彼の人の影を

ようやく捕えた 同時に彼の人は

団地の二棟目の入口に向つて

木の茂みに消えてゆく

車道を走つて 鉄板を飛びこえ

息せききつて 私は彼の人影を追う

彼の人は

山茶花と椿の垣の間に入つて

消えてしまった。

ユニ宇治団地第二棟の

ラセン階段を 登る人影

一階から二階へと 移りゆく人の影  
人影は

二階とも三階ともわかりがたく消えて  
そこで 無くなってしまうた

終りである

全て 終わりであつた

私は人影なきユニ第二棟の

ラセン階段を見上げて

佇んでいた

この内の

いずれかの部屋の

いずれかの机に

帽子を脱ぐ人

灯をとまさんとする仕草も

想像された

暮れなずむ樹木の間に

私は ほんのわずか 立ちつくしていた

彼の人の所在が明かされたのである

それは全く予期しない出来ごとであつた

それは 独りだけが知る 幸福であつた

誰にも語りえぬだけに

一層深い われを忘れるほどの

幸福感であつた

生と死を渦に巻いて

ラセン階段は

私の一生の前に 立ち上つていた

矢張り夫は現れた

想いの通り 此処にも居た

彼の人に逢う必要は

最早や 私に無い

此処に来て

ラセン階段を仰げば

それで 充分なのである

宇治の原 一面が 夕靄を引いて

今や 身に応えて

沁々と親しく 眺められた

# 赤絵の壺

左近育子

ぼくは同じ夢を何度も見るんだ。その夢はじつに奇妙で、まるで魔法にかかったみたい。ぼくは何かに操られているのだった。

場所はいつも洞窟みたいな岩がでこぼこしている洞穴で、湧き水が流れているようなサラサラという音がして、その音に導かれていくように洞穴の奥へ奥へと入ってしまっていた。洞穴の入り口には青々とした蔦が垂れ下がっていて、片方扉の壊れた鉄格子がありその前に立つと入っていらつしやいと言う声がする。一人で行くのは怖いので、いつも仲間と一緒に。たきちゃん、元ちゃん、翔太などに行くのだけれど、いつの間にか逸れてひとりぼっちになるんだ。気がつくといつも一人になっているんだけれど、不思議なことに少しも怖いやか寂しいとか思わないでいるんだ。洞穴の奥のほうに見える一条の光をめがけて、ぼくはゆっくりと歩いて行くのだ。洞穴の奥にはいつも蠟燭の灯がゆらゆらして、その炎の光に照らされて赤い大きな壺がぼくを呼んでいる。ここへいらつしやい、いいものあげるよ。壺の中からぼわあんとした声がした。ぼくはその声につられて赤い絵模様のような壺の前に立つ。ぼくのおへそぐらいの高さの壺の中をのぞくと、壺の底が金色に光っている。太陽を仰ぎ見るようなまぶしさで、思わず目を閉じてしまう。そしてふと気付くと手のひらにアーモンドチョコレートがのっている。ぼくはそれをスポンのポケットに

入れて一目散に洞穴の外に出るんだ。するといつも開いたままの片方の鉄格子の扉がぱたと閉まる。その音にびつくりして夢から目覚めるのだ。

いつも同じ洞穴で友達からはぐれて、蠟燭の灯に揺れる赤い壺の前にいる。

板チョコがバタークッキーか、おいしいちゃんが買ってくれたトーマスの機関車だったりするけれど夢のパターンはいつも同じさ。

ぼくは夢から覚めると、いつも布団の中で考える。いつか行つたことのあるような、見たことのあるような気がする。でもそこがどこだか思い出せないのだ。

ある日、ぼくは幼稚園で泥棒さんとみんなに言われた。

お絵かきの時間のことだった。隣の席の健太が新しいクレパスの箱をもも組のみんなに見せびらかした。二十四色の大きな箱でとてもきれいな色がずらりと並んでいた。わあすこいっとみんな声を上げた。

健太は得意がつて部屋を一回りすると、ぼくの顔にぐいとクレパスの箱を近づけ、どんなもんじやいと言ひ、ぼくのクレパスを見て笑った。ぼくのは十二色で、殆どが半分の短さで、大好きな水色なんてもう無くなつていた。箱はポロポロで汚かった。お母さんに新しいのを買つて欲しいと言つたが、まだいっぱい色が残っているでしょうと言ひ、

買つてもらえなかった。ぼくは隣の席の健太がうらやましくて仕方なかった。

ある日、ぼくは健太が帰つた後真新しいおおきなクレパスの箱をそつと自分の机の上に置き、ぼくのクレパスを健太の机においた。今日だけこの大きなクレパスをぼくの物にしようと思つた。自分の机の上にあるだけで幸せな気分になれた。もちろん盗もうなんて思つてもいなかった。あすの朝健太の机に戻せばいいと思つた。健太はいつも遅刻してくる子だから、ぼくは先に席に着き、クレパスを戻せばいい筈だった。

ところがその日に限つて、健太は早くに幼稚園に来ていた。そしてわんわん泣いていた。ぼくは先生にひどく叱られ、おかあさんが園長室に呼ばれた。もも組のみんなから泥棒さんと言われ、幼稚園に行かなくなつてしまった。

ぼくが洞穴の夢をよく見るようになったのはそのときからのように思う。

幼稚園に行かないとタダを握るぼくをおじいちゃんによく抱いて慰めてくれた。

幼稚園に行かない間、おじいちゃんが動物園や遊園地、デパートなどによく連れて行つてくれた。でも何も買つてくれなかった。欲しいと思つても我慢することも大切だよと言ひ、その場では買つてくれなかったが、誕生日だった日、クリスマスにちゃんとそれを買つてくれた。

年長組だったから半年幼稚園に行かず、一年生になった。

そんな優しいおじいちゃんが急に死んだ。

ぼくが二年生になって半年ほどしたときだった。じいちゃんば老人会の会長をしていて、いつも町内をうろうろしていた。

その日は市主催の敬老会が市民会館であった。各町内会からお年寄りが集まってお祝いの会があり、おじいちゃんは全町内会の代表として市長の祝辞に対してお礼の挨拶をすることになっていた。

朝から微熱があつて体調が良くなかったが、おじいちゃんば巻紙に毛筆で自分で書いたお礼の言葉を、朝ごはん前から何度も何度も練習していた。

おかあさんが心配してご挨拶を副会長さんをお願いしてみたらと言ったが、おじいちゃんばすごく張り切っていたから、大きく首を横に振った。

その日無事に挨拶できたとお機嫌で帰ってきたおじいちゃんば風呂場で倒れた。

脳溢血で二日後に死んでしまった。

四十九日の法要が終わわり、おじいちゃんのお骨をお寺に納めることになった。お父さんが白い骨壺の包みを膝に抱え、タクシーでお寺にむかった。

寺の裏山に先祖代々のお墓がある。本堂で長いお経を聞いたあとお坊さんと一緒に公墓参りをした。沢山のお墓の間を歩きながらお坊さんが杉木立のほうを指差し、けさ滝

に竜神さまがおたちになられましたのうと言った。年に一度か二度しかお姿はみられないのですと聞いて、お父さんもお母さんも大きく頷いて、じゃわたしたちも拌みにいこうと言った。

本堂とは反対に進む道を行くと杉木立のなかの細い坂道をゆるゆると下った。小川の流れるところに来て、ぼくははっとした。夢の中でいつも聞いている水の音だ。小さな石橋を渡って足場のじめじめする岩場に出た。小さな滝が流れていて目の前に夢で見るのとそっくりな洞窟だった。蔦が暖簾のように垂れ下がっていて鉄の柵の扉まで。ただ違うのは扉の片方が壊れていなくてびたりとしまっていることだった。その中に大きな白蛇がいてそれが時折折棚の扉の隙間から這い出てきて滝つばに姿を現すらしい。その蛇が滝つばに射し込む木洩れ日の光で滝の中に虹をつくることがあるらしい。洞穴から出てきた白蛇の胴体がかねて七色になると神様の姿になると言い伝えられているらしい。神様が現れるとどうなるの。見た人にいいことがあるんだって。でもたまには悪いことの起きるのを知らせてくれたりもするらしいよとお母さんが言った。

洞穴の入り口に神棚が祭られていて蠟燭の灯がゆらゆらしている。夢の中のひかりと同じだと思えた。でも夢の中に出てくる赤い絵模様のような大きな重なり何処にもなかった。滝の水飛沫が当たるのに蠟燭の灯がきえないのがよくには

不思議だった。

ぼくは洞穴の奥を食い入るように見つめていたが、白い蛇は出てきそうになかった。

出てこなくてよかったのだ。その夜もぼくはいつもの夢を見た。蠟燭に揺れる赤い壺から蛇が出てきて追いかけられたりしたらぼくは気が狂ってしまうかもしれない。でもどうして奇妙な夢ばかり見るのだろうか。

おじいちゃんが死んで一年が過ぎた。

そろそろあの部屋を片付けようと、お父さんが言い出してお母さんもおじいちゃんの部屋に入って行った。

おじいちゃんは骨董好きで友達だという古美術屋さんから掛け軸やら壺や皿などをいっぱい買っていた。部屋には紐のかかった木箱がたくさんあった。大きいのも小さいものやらが押入れのなかに山積みされていた。床の間にはいつもいろいろな掛け軸がかけかえられ、老人会の友達が遊びに来るたび、木箱の蓋を開け、自慢げに品物を見せていた。

おかあさんが窓の障子を開け、お父さんが骨董屋さんに電話をかけた。

やがていつものおじさんではない骨董屋さんが三輪トラックに乗ってやって来た。

どうせ偽物ばかり掴まされていたと思いますよ。一つや二つはいい物もあるかもしれませんが、適当に目利きして

処分していつて下さい。お父さんが言うとお父さんのは部屋中を見渡して、随分たくさんありますねえと感心した。ええ、家一軒買えるほどですよ。お母さんはいままで押えていた不満をぶちまけるように言った。

売のおじさんは押入れからも天袋からもつぎつぎと木箱を取り出し、蓋をあけていった。

まったく良く出来た偽物ですな。やっぱりね。おかあさんが落胆した顔になった。でも、これだけ精巧に出来ていれば素人さんじゃだまされますよ。おじさんは慰めるように言った。ぼくは木箱から何が出てくるのかと、まるで玩具箱をひっくり返す感じで眺めていた。おじさんは木箱を確かめながら赤膚、清水、伊万里などと呟きながら、ノートになにやら書き留めていく。景徳鎮もありますな。でもよくこれだけ偽物ばかり掴まされたものといひながら、山積みになった木箱をかかえて乗ってきた車の荷台に置き、同じことを三回繰り返した。押し入れの中が殆んど空っぽになった。

おじさんは禿げた頭がぶつかるほど押入れに頭を突っ込んで残りの木箱を何個か取り出し、おもむろに紐を解いた。おじさんは最後に取り出した大きな箱を見るなり目をきらりとさせ、蓋を開けるなり大きな声を出した。これはいいもんだわ。木箱の中から出てきたのは首の長いおおきな赤い壺だった。ぼくはびっくりした。いつも夢に見るのとそ

つくりだった。朱色のような赤い絵柄の壺はおかあさんのおおきなお尻のようにふつくらしていて、鶴の首みたいな細い口は開いた朝顔の花のような形をしていた。夢に出てくるのより少し小さいけれど、どこかゆったりした感じの壺だった。

おじさんは膝の上に大事そうに壺を置き、底を眺めてうんうんと頷いた。

ぼくは夢の中のとそっくりの壺のなかを確かめたかった。壺の底が夢のように金色に眩しく光っていないか。

おつとつとつ、ぼくちゃん手荒なことをしてはいけないよ。これは坂井田柿右衛門<sup>かきえもん</sup>という偉い人が作ったものでね、とても古くて大切な物だよ。そう言つて壺を抱きかかえた。

柿右衛門だつて、そりゃ本物ですかい。

お父さんは目を丸くして、膝を乗り出した。

勿論、初代柿右衛門、江戸前期の赤絵磁器です。木箱を突き出し、消えなかった黒い文字を指さした。その指が心なしか震えていた。

どうしてこんな貴重な品がここにあるのだ、一度大学の偉い先生に鑑定してもらいましょう。少しの間お借りします。さすが骨董に凝つていらしただけある。ご隠居様も大した人だ。

おじさんは禿頭をてかてかさせ、しょぼくれたお尻をくねらせながら、赤い壺を大事そうに抱えて帰った。ぼくはおかしかった。偽物ばかり掴まされてとさんさんおじいちゃんの悪口ばかり言つていたのに。

その後赤い壺がどうなったかぼくは知らない。

ただ言えることは、あれ以来赤い壺も洞穴も、蠟燭の炎もぼくの夢に出てこなくなつたつてことさ。

鳥語 次号 六十二号の原稿を  
二千十一年三月二十日まで  
鳥語発行所へ送ってください



「鳥語」発行所

639-1039

大和郡山市榎木町11-4

## ドイツ悠悠

木下 蘭子

近年、これが最後と言いつつ何度もドイツを旅してきた。そして今回こそ最後と太郎は言う。

ドイツは太郎と百子にとって結婚以来、家族で暮した経験のある唯一の外国なのだ。それはもう四十年も昔のことなのだけれど、老齢になってますますドイツに拘るのは昔を懐かしむ、郷愁に近い感情かもしれない。

「これが最後になるから、ホルベックさんには何か日本的な上等の記念品を持っていこう」太郎は百子に何がいいか考えろとうるさく言った。ホルベックさんはドイツ時代に一緒に仕事をしたドイツ人だ。

腰痛を考えて荷物は極力少なくしろとも言ふ。百子はデパートをウロウロして、西陣織のテーブルセンターを用意した。他にも訪ねる人は何人かいるから、お土産が結構大

変なのである。

太郎は数ヶ月前から旅の準備に余念がなかった。ドイツへの個人旅行だけにプランからホテルの宿泊、オペラやコンサート、チケットの予約等々、インターネットを駆使し、毎日パソコンの前に座って、熱心に取り組んでいた。これは半分、趣味の世界だから百子はなすがままに見ていた。今回のドイツ行きも、大学の同窓生が化学史の旅と称して、ドイツの化学界を創設し発展させた偉大なる化学者たちの足跡を訪ねる旅の、パートⅢに参加がてらというものだ。

大学で化学を専攻したものはドイツへの憧れが強い。いままでの二回の旅ではギーゼン大学を皮切りに、ハイデルベルク、ミュンヘン、ダルムシュタット、ゲッティンゲン、ベルリンと多くの大学都市を巡った。化学者たちが葬られているお墓を訪ね、記念碑や銅像を見てきた。今回もボン、

そしてミュンヘンを再訪することになっている。

太郎の健康のことを考えるとやはり一緒に行つたほうがいい。仲間との行程が終ると、懐かしい人に会いに行くというのだから尚更一緒に行かないと困るだろう。

仲間の希望で、ミュンヘンでは近郊のスタルンベルク湖の水上コンサートに行こうという話になった。太郎はネットでチケットの予約をした。仲介のミュンヘンチケットで購入する。送料込みの値段をカードで支払う手筈を踏んだ。ところが仲介は日本へはチケットを送れないと言つてきた。ミュンヘン市内のチケット屋預けになるというのだ。

気の小さい太郎は相手が確かな業者なのか、騙されていないか心配した。九ユーロの送料もうやむやだし、仲間の分を入れると十万円を超える買い物なのである。

太郎は連日パソコンにしがみつき、噂が明かないものだから、購入をキャンセルした。ところが相手はキャンセルできないという。カードを切つてしまつていたので、カード会社にも電話を入れ、不正にお金落ちないように警戒した。なにしろ遠い国との道取りだ。大好きなドイツといえども全面的には信用はできない。ついに太郎はホルベックさんにメールを入れ、事情を話し、相手との交渉をやつてもらつて、コンサートのチケットは彼に購入してもらい、送つてもらつた。一件落着するのにな二週間近くかかり、

ホルベックさんへの送金に結構な手数料を払つた。

「たいへんねえ」

百子はこうしたもろもろに連日、体力気力を注ぐ太郎を褒めていいのか、馬鹿だとけなしていいのか迷うところだ。パソコンを使つて、ドイツ語もしくは英語でいろいろ交渉することは老人としてはよくやると褒めてもいいが、ネットでの売買に不安を募らせるくらいなら初めから止めとけばいいのだ。

「ミュンヘンでオペラも観ようか」ときた。

「珍しいことを言うわねえ。あなたは夜は行動しながらなのよ」

「皆、行きたいそうだよ」

太郎はまたパソコンにしがみつき、オペラのチケット購入に乗り出した。劇場に直接アクセスして、一人二枚まで買えるという。今度は仲間の分まで買うわけにはいかない。旅行社も出来ないという。仲間に購入の仕方をアドバイスし、販売初日、時差を考慮してパソコンの前に座り込んだ。なかなか繋がらない。やっと繋がったときは残席数僅かであつた。とにかく太郎はチケットを予約できたが、他の仲間も駄目だつた。こうした劇場でのチケット販売は、予約しておけば当日バスポートとカードを提示することで簡単に買えるし、信用出来るそう。演目が人気の「カルメン」だつたからか、すぐに満席になつて他の仲間には気の毒な

結果になってしまった。

六月初め、こうして太郎と百子はドイツへと旅立った。麗しの五月ではないが、六月はいちばん日が長く、夜遊びには打ってつけなのだ。

乗り継ぎのフランクフルト空港、何度も降り立ったドイツの玄関だ。国内線乗り場に移動してホッとしたところで、コーヒードームでも飲もうということになった。あまり気のきかない太郎だがコーヒードームだけはサービスする。日本でもドイツ好きで、よく百子にサービスするのだ。ましてやここはドイツ、レディーファーストの西洋文化の国。百子はセルフサービス店内の空いた席を探し、太郎を待った。

重いショルダーを肩にかけた太郎が両手にコーヒードームを持って来ようとしている。慌てて左手のコーヒードームを受け取り、先に席に置いた。太郎は右手のコーヒードームをテーブルに置こうとしてぐらつき、テーブルに置く一瞬の間に、カップをひっくり返してしまった。

セルフの店内は長椅子長テーブルになつていて、隣の席で休んでいたお客の椅子へと、コーヒードームは流れていった。あれよあれよという間の出来事だった。お尻がコーヒードームで濡れて、男はびっくりして立ち上がった。太郎は真っ青になった。大変だ、百子も一瞬（どうしよう）と呆然となった。太郎は必死で胸ポケットから財布を出して謝っている。

咄嗟に弁償しなければと思ったのだろう。

百子はカウンターへ急ぎ、紙ナフキンをわしづかみにして戻ると、そこいらを拭いた。太郎も店員に雑巾を頼みに走った。店員は紙雑巾をたくさん持つてきて、てきぱきと処理しだした。男性は「いいよ、いいよ」というふうには手を振って、紙雑巾をお尻に敷いて座りなおした。店員は「コーヒードームは濡れなおしましょう」と涼しい顔で言った。

「どうしよう。彼はもういいと言うけど、このままでは駄目だろう」

「そうねえ。お尻に火傷してないかなあ」

「関空でマルモさんにと買った生八橋をあげようか」

「マルモさんはドイツ人でも日本をよく知ってるけど、普通のドイツ人なら変な食べ物だと嫌うよ」

太郎の冴えない顔を見て、百子は店外へ走った。免税店が並んでいる。ドイツ人はチョココレートが好きだ。綺麗に包装されりボンまで付いているスイスのチョココレートを買って、彼にお詫びをする方がいい。

「ほんとうに申し訳なかつた。こんなもので済むとは思わないが、子どもさんにも」

太郎はドイツ語で詫びつつ、差し出した。

「やあ、いいですよ。子どもはいないし」

「いや、たいしたものではない。あなたの温かい気持ちに」

対してのお礼です。受け取ってください」

「じゃあ、ありがとう。僕を信用したらいい。失敗は誰にでもあることだ」

彼はさわやかな表情で握手を求め、太郎の手を握って、心配するなど励ました。

「休暇旅行を終えて、ハノーファーへ帰るところなんだ。

これからどちらへ？」

「日本からいま着いて、ミュンヘンへ行くのですよ」

「いいご旅行を」

「ありがとう」

こうして太郎の失敗は決着した。そういえば彼はGパンを穿いていた。紙雑巾でかなりの水分を取り除いたとはいえ、お尻には不快感が残っているはずだ。ドイツのコーヒ―はそれほど熱くないので、火傷はしていないかも。でもわからない。本当に申し訳なかった。

出発まで一所懸命にドイツ語と向き合い、いよいよドイツに到着してドイツ語の実力発揮というときに、こんな失敗をし、お詫びだらけのドイツ語が使ひ初めになった太郎が可哀そうだった。百子は太郎がショックで脳梗塞でも起したら大変だと一瞬思った。蒼白になった太郎など普段見たことがない。完璧主義者だけにどれだけ落胆したかと思うと、気の毒でならなかった。

ミュンヘンのホテルに落ち着くと、太郎はビールを飲ん

で深くソファアに座り込んだ。

「相手がいい人で良かったねえ。女の人だったり、背広の人だったら、たじやあ済まなかったかもね。Gパンでよかったわ」

「俺を信用しろー」と言ってくれた。ありがたかったよ」

ドイツの一日目はこうして暮れていった。

## 二

「今日の予定は？」ホテルの朝食を摂りながら百子は聞いた。すべて太郎のプランでことは進む。

「まず、ダッハウへ行く」

「ダッハウ！」

悪名高いヒットラー時代の強制収容所をいままで一度も訪ねたことがない。太郎もこの手のものは苦手なのはどういう心境の変化？

以前、ポーランドに行く機会があったときも、太郎はシヨパンの故郷へは行きたがったが、アウシュビッツへは行こうとしなかった。ヒットラーが各地に数多く作った主にユダヤ人強制収容所の実態は戦後人々を震撼させるものだった。百子もフランクルの「夜と霧」を読み、映画スピルバーグの「シンドラーのリスト」やベニーニの「ライフ・イズ・ビューティフル」を観た。いくらか知識はある。で

もその場所に立つたことはない。

ミュンヘン駅から市電に乗って北西へ十六キロ。ダッハウ駅からはバスで収容所へ向かう。青少年の来訪者が意外と多い。団体で引率されて来ている。

収容所は白樺やポプラの並木に囲まれた平坦な場所にあった。ドイツで最初に作られ、その後各地の強制収容所の原型と基準になったという。ユダヤ人ばかりでなく、宗教上、思想上、政治上の問題で収容された人も多かった。

平坦な敷地は殆どが更地で、建物の土台がコンクリートで作られている。当時の収容棟を再現した建屋が二棟新たに作られ、内部を公開している。区切られた二段ベッド、区切りのない三段ベッド、まるで家畜小屋である。博物館と称する建物には当時の様子を偲ばせる品々が展示され、ガス室のような部屋もあった。

聖職者を多く収容したことで、ローマ法王との確執があり、また終戦間際にはバイエルン王室に関係ある人やオーストリア大公の子息、息女などの収容もあった。ここは強制労働も緩やかなものだったというが、支所で疾病や栄養失調、自殺などで亡くなった人も多い。ガス室を利用した実績はないという。それでも連合軍によって解放されたときは目を覆うばかりの光景だったそうだ。死者約四万二千八人。

百子は映画の場面や本の写真を思い出しながら、資料館

を見た。太郎も百子も無言だった。言葉にならない。先生の話に聞き入る高校生の横をすり抜け、夏でもひんやりとしている壁だらけの部屋を回った。

表に出ると、強い陽射しに目が眩みそうだった。先週まで雨ばかりだったというのに、今週から急に夏が始まったのだそうだ。真夏の太陽が照り付け、アフリカからの熱波で恐ろしく暑い。広い敷地にはいまなお有刺鉄線が張り巡らされ、監視塔がいくつも立っている。更地には木陰がない。出入口の鉄の扉には「アルバイト・マハト・フライ」の文字。

「働けば自由になる」

なんという嘘だろう。なんという人間の尊厳を無視した仕打ちだろう。人間はここまで鬼になれるのか。

もと来た道をミュンヘン市内に戻る。一九七二年ミュンヘンオリンピック会場跡へ行つて、近くのテレビ塔に上った。二人は街ではよく高いところへ上がる。街の全貌が見られるからだ。

「ホラ、あそこに聖母教会があるね」

「ずっと山手の方にニンフェンベルク宮殿が見えるだろう」  
バイエルン王室の離宮は市の郊外にあるのだが、真つ直ぐな道で結ばれているのがよくわかる。

「あそこに美人の肖像画がずらりと並んだギャラリーがあ

ったわね」

二人は以前訪れたことがあるのだ。

「たしか王様が愛した女性たちの肖像画だったわ」

「宮廷画家に描かせたんだろ。それを部屋中に飾っているのだから、悪趣味だ」

「美人といくらでも寝られるのだから、王様になりたいでしょ」

「そりゃあ男の理想だろうよ。美人のタイプもいろいろあるから、触手が動くのだろう。でも女はうるさいから気楽なものではなからうよ。あれだけの数をこなすには相当体力がいるよ」

「王様ってほかにすることないんだらうか」

テレビ塔の上でつまらないおしゃべりをして、ダツハウでの重い気分が少し和らいだ。

真下にはオリンピックスタジアムはじめ数々の競技施設があり、別の方角には人気の高いクルマ、BMWの高層本社ビルが目立つ。内部には、歴史的な自動車などを展示する博物館もあると聞く。ビルに併設して大きな工場が続く。BMWのBは、バイエルンを表わしているのだ。ミュンヘンの代表企業のひとつである。

「ドイツで暮らしたとき乗っていたのがBMWよね」

「そうだ。2000ccだった。駐在員の多くはベンツに乗っていたけど、オレはBMWにしたんだ。まだ若かった

しね」

「そのクルマであちこち走ったわねえ。娘二人を後ろに乗せてさ。ドイツばかりかスイスにも行ったし北欧にも行ったわね」

青空と広い風景を見ているうちに、そろそろお腹も空いてきた。下のカフェで昼食のバイキングを食べた。皿に取った料理を目方で値付けする。あまり食べない二人にはいいシステムである。

太郎は昼も夜もビールだ。ドイツのビールは美味しいそう。生ビールを楽しんでいる。

食事には豚肉の煮込みやじゃがいも、酢キャベツやソーセージ、シュニッツェルという揚げ料理もある。きのこ料理も美味しいが、この季節はやはり白アスパラだ。街の広場の屋台では山のように盛って白アスパラが売られている。皮を剥いて湯がいて、バターで炒めるのが一般的。ハムなどを添えて食べる。白アスパラのスープもこの季節ならではの一品だ。ドイツの美味しいパンとスープがあれば百子には充分である。

百子はドイツへ来ると必ず大きなケーキを食べる。日本のようにちまちましたケーキではない。トルテという大きな丸いケーキには、チーズ、さくらんぼ、リンゴ、アンズなどいろいろ種類がある。今日は何にしようかと迷う。一切れが充分大きいのが何よりいい。

市内へ戻り、大学街をぶらぶらして、隣接する広大なイギリス風庭園へ行ってみた。かんかん照りである。帽子を被つていても陽射しがきつい。なのにドイツ人は誰一人として帽子を被つていない。おまけに殆ど裸で芝生で日光浴だ。水着なら裸に近くても軽犯罪にならないお国。太郎は肉体美に目が眩む。

太陽の恵みの少ない北国、夏になると、思い切り肌を出して陽を浴びるのだ。街行く女性の服装も襟ぐりを大きく開けたものだ。若い女性の乳房が飛び出しそうに弾んでいる。太郎はときどき目の遣りどころに困り、

「こりやかなわんよ」と言いつつ楽しんでいるのは確実。

大きな胸を殆ど出している女性と傍で喋っている若い男性。男はそういうものを見慣れているのだろう。人種が違うってこういうことだなあと百子は思う。

なるべく木陰を見つけて歩いていると、木造の中国風五重塔のような建物のそばに野外ビアガーデンがあった。多くの男女がビールと夏の日の午後を楽しんでいる。百子はアイスを買って食べながら歩いた。

今夜はオベラ観賞である。なんとタフな一日か。太郎は日頃体調の不具合が多く、しょっちゅう病院通いをしている。腰の痛みが悪いと言つて重いものは一切持たず、庭仕事もしない。病院へ行くのが仕事のようになっている人だ。

その人がドイツに着くや、猛然と行動することに百子は驚く以上に「これはなんだろう」と思う。

「ベッドがいいのかな。腰が全然痛くない」

（人間、好きなことしているといいのよ、きつと）百子はしらーつと太郎の横顔を眺めた。

バイエルン州立歌劇場は歩いていける距離にある。イザール門近くのホテルは真に便利がいい。新市庁舎も聖母教会もホフブローイハウスも徒歩圏内。王の居城レジデンツだつて歩こうと思えば歩ける距離だ。

開演前のホールは着飾った紳士淑女で賑わっていた。旅行中の百子は服装はともかく旅行靴そのままなのが気がかりだった。極力荷物を減らすために、替えの靴を持たずに来たのだ。きよろきよると回りを見て、自分が恥ずかしくないか観察した。おばあちゃんの中には歩きやすい靴の人もある。ちよつとホツとした。服装もどことなく田舎臭い。並でよかった。

劇場内部の装飾も質素である。でも王立劇場として作られ、現在のものは戦後再建されたというが、一階席をぐるりと取り囲むように作られたテラス席、王家のための特別席があつて、日本の劇場とは違う。ドレスデンのゼンパーオパーのようなゴウジャスさはないものの雰囲気は十九世紀である。

満席の観客の前で演じられた「カルメン」。主役カルメンはエストニア出身の若手、ドン・ホセはここミュンヘン出身とか、大変な人気だった。濡れ場をリアルに演じるのは現代風演出なのか、寝転がって歌っても声量が変わらず豊かなのには驚いた。

幕間にはシャンペンやワインを飲む人が多い。二人はオレンジジュースにしておいた。なにしろドイツに来てまだ二日目。時差はけ最中である。おまけに一日中歩き回ってクタクタだ。ホテルでちよつと昼寝してきたとはいえ、観劇中に時折睡魔が襲う。寝てはならじと夕食も摂っていない。演目がストーリーも音楽も知り尽くしたものだからいいものの、ワーグナーものならぐうぐう寝てしまいうさだ。カルメンがホセに殺されるところで、劇場内は興奮に包まれ、大音響の中で幕を閉じた。役者全員によるフィナーレ。主だった役者が手を繋いで何度も客の声援に応える。指揮者も登場する。演じた者と観賞した者との一体感と華やかさが劇場全体を包み、余韻を残して終幕となった。

夜風に吹かれて街を歩いた。こういう時に百子の手でも握ればいいのに太郎はさつさと前を歩く。百子も太郎の腕に縋ればいいのにしない。そばを手を繋ぎ寄り添って歩く夫婦が通り過ぎた。

カフェバーで軽食を摂ってホテルに戻った。歌劇場での

興奮がなかなか収まらない。

「やっぱりヨーロッパは大人の文化だね」

「夜を楽しむ文化って奴さ」

### 三

今日からいよいよドイツ化学史の旅・パートⅢの始まりだ。現地集合現地解散がモットーの仲間旅行。テーマを持って旅することはいいことではある。

皆さんはケルン、ボンを回って昨日ミュンヘンに入った。太郎たちがミュンヘンに直行したのにはワケがあった。百子の甥っ子の結婚式が発前にあつたのだ。

総勢十名は歩いて旧市街へ出、市電に乗ってマクシミリアン広場に出た。高名な化学者リービッヒとベッテンコッフアーの大きな記念像が向かい合っている場所だ。ミュンヘン大学でドイツにおける化学の発展に尽力した二人、ベッテンコッフアーはリービッヒの弟子だという。いままでもいくつかそうした化学者の記念像を見てきた。尊敬する偉人の像の前に立つ。百子には「それは龍馬に惚れた人が高知の桂浜まで彼の銅像を見に行くようなものだ」と思える。一緒に写真に納まる誉。可愛いと言えは可愛い。

次に有名なドイツ博物館へ行つた。世界に誇る科学の博物館。収集好きのドイツならではの迫力。百子はもちろん

つと変わったと感じた。以前太郎と来たときとは違う。あらゆるものが数多く揃っていると感じたものだが、なにか拍子抜けした。そのはずでいま補修中、多くのものが別の場所に移されていたのだ。

広い館内を短時間で見て回るのは大変である。興味のある階を選んで見学した。集めたものを展示するだけの博物館から実際に触ったり実験したり出来るものに変わりつつあるという。

夕方から始まる水上コンサートへ行くべく早く切り上げ、電車に乗った。シュタルンベルク湖畔の駅まで四十分。ミューンヘン市内を離れ、緑豊かな南ドイツの風景を楽しみながらの車内のおしゃべりは絶えない。今回はアメリカから参加したご夫婦がある。長くアメリカの大学で研究された同窓生で、現在もアメリカに在住だ。

「奥様は私と同じように四国の新居浜で暮らされたことがあるのよ。通った小学校も同じ惣開小だつて」百子はこんな偶然が嬉しいてならない。子ども時代の幾年かと同じ場所を過ごしたという連帯感。憶えている風景も同じなのだ。すったもんだの末に手に入れたチケットをそれこそ握り締めてここに来た。シュタルンベルク駅のすぐそばから船は出る。かなり大きい湖をゆつくり遊覧しながら食事をし、室内楽を楽しみ、周りの景色をデッキで眺め、夜までの四

時間ほどを船で過ごすのだ。

「バイエルンの王侯貴族の遊びだったんじゃないかな」太郎は呟いた。

船首に立った奏者のトランペットのファンファーレに迎えられて、船に乗った。

食前酒が配られた。二日続けての夜遊び、百子は口当たりのいいシャンパンを飲んで、すっかり酔っ払ってしまった。司会の人のはドイツ語だしマイクはガンガンするし殆どわからない。百子はほおつとなつて座っていた。テーブルには色とりよく飾られた盛り花とカナッペ。二〇〇人ほどのお客は十人ずつのテーブルに座って歓談していた。百子の隣のドイツ人夫婦はミュンヘン近郊から来たという結婚記念日を祝つてということだった。

百子は酔い醒ましにデッキへ出た。遠くにドイツアルプスが雪を被つて見える。湖面は鏡のように静かである。デッキチェアに座つて夜風に吹かれた。

この湖はかの有名なノイシュバンシュタイン（白鳥城）を作ったバイエルンの王、ルードヴィッヒ二世が浪費と精神異常を言い立てる議会によつてベルク城に幽閉され、水死体となつて発見されたところだ。その場所は何処なのだろう。船が出た港の近くではあるらしい。十九世紀のバイエルンを想い、狂人と言われながらも数多くの文化遺産を残した王の人生を想った。映画に描かれる王は神経質な貴

公子だ。でもニンフェンベルクに残る彼の肖像画は太目のちよつとだらしない姿。その行動といい、どこか鬱屈したものを感ずる。百子は一度も結婚しなかった王ルードヴィヒ二世と、数多くの愛人の肖像画を残した祖父である王ルードヴィヒ一世とを比べ、普通とは何だろう、王は普通を許されない存在なのだろうか、酔いの回った頭でぼんやりと考えた。

コンサートが始まるので席に戻ると、たつぷりのドイツ料理が出されていた。豚肉の煮込みと七面鳥のグリル、じやがいもは細かく刻まれてミルフィーユのように幾層にも重ねられて焼いたもの。大皿の料理を半分も食べられない。そばのドイツ夫人はべろりと平らげ、飲み放題のワインを何度もお変わりしていた。

ヴィヴァルディとバッハの室内楽。チェンバロとバイオリン、チェロにフルート。聞いているとやはり眠い。空が赤みを増し日没が近づいたようだ。バイエルンの低い山並みに日は落ちていった。とつくに九時を過ぎていく。

演奏は何度かに分けて行われ、いよいよ帰港のときが来た。棧橋に降り立つと、突如として火花が打ち上げられた。ドイツの夏の夜空に輝く火花、大人の夜遊びの終焉である。琵琶湖にも遊覧船はある。でも大人ばかりで楽しむ空間はあるだろうか。オペラも同じで、大人と子どもをしっかりと区別する風習を百子はいいことだと思ふ。子どもの声は場

の優雅さを打ち消してしまう。

今夜ばかりは王妃の気分でホテルに帰った。いえ、腰元かもね。

#### 四

いままでにドイツの小都市をいくつも見てきたが、百子はミュンヘンに居るのなら、まだ行っていないパッサウとレーゲンスブルクを訪ねたいと希望した。希望はそれだけで後は太郎任せだ。

百子がパッサウに興味を持った理由は簡単。関わっているY.W.C.A.の合唱団がここで演奏したことがあるからだ。仲間が歌ったという大型堂ドームへ行ってみよう。

ドイツ鉄道に乗ってパッサウへ向かう。格安で行く為には一日乗り放題チケット五人まで利用可で午前九時以降の列車に乗ること。自販機で買えば二十八ユーロである。二人で乗ろうと五人で乗ろうと同じ値段、安いものだ。ドイツはこうして鉄道による移動を推奨している。もっともこのチケットでは特急には乗車できない。高齢者向けと言えは言える。

一時間十五分ほどで着いた。パッサウは三つの川、ドナウ・イン・イルツが合流するオーストリア国境近くの小さな町。先のとがった合流点まで歩いた。水嵩を増した川が

合流してとうとうと流れている。ドナウの遊覧船が停泊していた。小高い山の上から見ればもつと面白いだろう。夕方ミュンヘンで会う人がいる太郎には時間がない。帰りの時間はかり気にする太郎に

「ドームを見ないで帰ったら、YWCAの人に笑われるわ」と百子はふくれた。

ついですぐドームには行ってみたが、丁度十二時からのコンサートが開かれていて、入り口は堅く閉ざされていた。ドームそのものも修復中で、外は工事の音がうるさかった。教会のパイプオルガンとしては世界一だというオルガンの演奏が行われていたのかもしれない。

ドナウ川に沿って歩いてみると、アメリカ人らしい観光客の団体さんがぞろぞろと引き揚げてきた。先ほどの遊覧船のお客らしい。ドナウを船で遊覧するのもいいものだろう。

インフォメーションがあった。尋ねるとコンサートは十二時半には終り、いまは中に入れるという。急いで戻った。

薄暗い中は高い円柱、ステンドグラスの窓、祭壇の飾り、マリア像、カトリックの教会らしい佇まい。左上にパイプオルガンが聳え立つ。格式のあるものらしくどつしりとして、黒光りするパイプに金の細工が施されている。もう少し早く到着してその音が聞けたらよかったのに残念である。

「CDでも買って帰ったらどうや。これで気が済んだら」太郎は帰りを急ぐ。

ミュンヘンのホテルに戻って着替える間もなくマルモさんはやってきた。真っ黒に日焼けして。

彼女は太郎のかつてのドイツ語の先生である。真面目で優等生の太郎は教師受けがいい。教師が帰国した後も、太郎はメールやクリスマスカードの遣り取りなどで繋がりを大事にした。そしてドイツに行くとなると連絡を取って会うことになるのだ。

「やあやあ」と堅い握手を交わして、話し出した。

「メールの返事が遅れてごめんなさい。休暇旅行で二週間ケニアに行つたのよ。ぎりぎり連絡が間に合つて良かったわ」

真っ黒のわけが分かった。

マルモさんは大阪のドイツ語学校のその後の様子を聞き、ケニアの話をし、終始にこやかに太郎の話を聞いた。百子が片言のドイツ語を挟むと、優しい笑顔を向けて、その次を促す。分かるうとして次の言葉を助ける。五十歳近いドイツのインテリ夫人だ。二時間ほどおしゃべりしてお別れしたが、なんともさわやかなお人だった。

「ドイツではどんなお仕事をされているの？」

「タッハウで障害のある子どもの指導らしいよ」

「ダッハウ？」

太郎がダッハウへ行こうとした訳が百子に解けた。男って面白いものだ。お蔭で初めて強制収容所というものを見学できたのだから百子に文句はない。

お土産はお習字用の筆、墨、用紙などと閑空で買った生八橋。彼女の夫は生物化学の専門家で日本の研究機関とも関係のある仕事をしている。そうしたことがかつて長く日本に夫婦で滞在した。そのとき、彼女はドイツ語学校の教師として働いたのだ。ご夫君の方は帰国後もとときどき訪日の機会があるようだ。マルモさんは自分の本来の仕事に戻り、その後、来日したことはない。

「ケニアでたくさん動物を見たけど、ライオンも木登りするのよ」

といった話を百子は忘れないだろう。夏休みを家族とともに非日常のところでゆったり過ごす。これはドイツ人の夏休みの過ごし方で、習慣に近い。南アフリカで行われているワイルドカップの話をする。

「あれはうるさいだけ。あまり興味ないわ」

手を振ってホテル前の道を去って行ったマルモさんだった。

夜は仲間とホフブロイハウスで会食となった。この有名なビヤホールは一階は一般客、二階には大テーブルの団体

客、そして別に静かな部屋といろいろ揃っている。一階にはバイエルンの扮装をした楽隊がズンチャカズンチャカとこの地方特有の音楽を奏で、大声で騒ぐ客で溢れて大層賑やかだ。二階の団体客用ではリーダーが音頭を取って「乾杯、ツンボール！」と腕を組み、大きなジョッキを掲げて団結するのだ。ヒットラーはここでよく演説を打ったという。

前回は二階で騒いだが、今回は皆で語らいたい太郎たち一行は二階の静かな場所に席を取り、改めて久し振りの会食を楽しんだ。日本にいても東京組が多く、太郎と百子だけが関西で、めったに会うことがない。大振りのジョッキで生ビールを楽しみ、例によってシュバーゲル（白アスパラ）を食べた。

ミュンヘン大学で活躍した偉大な化学者の記念像に接し、殿方たちはリービッヒのお墓参りもして目的は達成されたようだ。

「同じ墓所にシーボルトの墓もあったよ」と太郎は話した。「シーボルトはドイツでは無名に近い。お参りするのは日本人くらいかな」

化学者にまつわる話は尽きることなく、夢中で話している殿方を尻目に、女は女同士、腰が痛い、指が変形してきたのと加齢現象を嘆きあった。確かにこの五年間で皆、歳を取った。心筋梗塞を起こし、心臓にステントを入れた

方もいる。初めてアメリカから参加された奥様が、

「息子が突然亡くなって、まだ気持の整理が出来ないのよ」と伏目がちに言われたとき、百子は言葉が出なかった。

百子にも悩みは多々ある。でも子どもを亡くすということがどんなにダメージの大きいものか想像すらできない。

一見、豊かで優雅に見える高齢者の海外旅行だが、それぞれ苦を抱えて、それでも夫婦揃って旅をする。幸せとは大きなものの一面なのだ。

明日からは帰国の途につく者、イタリアへ飛ぶ者、アメリカへ帰るもの、いろいろだ。太郎と百子はまだしばらくドイツをウロウロする。

「またお会いしましょう。アウフビーダーゼーエン！」

三度にわたるドイツ化学史の旅は、仲間の一人が「化学史学会」で発表するという。一つの世界に興味と拘りを持つて旅した記録。付いて回った私にもドイツの大学の伝統が伝わるものではあった。

## 五

ミュンヘン空港で大きな荷物を一時預けにして、鉄道を使ってレーゲンスブルクへ向かった。

「今日のホテルは今回の旅の中でいちばん上等なのだよ」と太郎が得意そうに言った。万事節約型の太郎は高級ホテルなど滅多に使わない。

駅前公園に面し、満酒な付まいでそのホテルはあった。確かに由緒ありそう。チェックインして部屋に入ると、むっとしている。エアコン無し。扇風機がある。なるほど由緒あるが近代的ではないのだ。

折からの熱波で南ドイツは猛暑である。窓を開け、扇風機を回して凌ぐしかない。

「高級ホテルでも安いはずだ。この暑いのにかなわないね」「外の眺めはいいじゃない。あら、日本の国旗が上がっているよ」

公園に面した道沿いに六本の細長い旗が並んでいる。EUやドイツ、スペインの国旗と仲良く日本の日の丸があるのだ。

「ねえ、私たちが泊まっているから？」

「そうかも知れないね。大歓迎さ」

太郎は得意そうである。暑いけどねえ。

荷物を置いて観光に出かけた。大通りに商店が並び、どつしりとした構えの街である。大聖堂の尖塔が見え出す。

その前を抜け、十五分も歩くとドナウ川に出た。有名なアーチのある石の橋が目の前にある。ローマ時代のものだ。ドイツで最も古い石橋。ローマ時代からドナウ川沿いの要衝として栄えた町のシンボルの一つだ。

丁度お昼時。太郎は橋の決のヒストリーリッシェ・ブルス

トキユツへ（歴史的焼きソーセージの店）でソーセージと酢キャベツを食べようと言う。この地方の焼きソーセージは美味しい。十一世紀に石橋を建設する際、河畔に飯場として作られた場所の名残の店である。

夏の最中、店先の長テーブルと長椅子にはたくさんの方が座って、ビールを飲みつつソーセージを食べていた。

「昔、仕事の帰りにここで食べたことがあるよ。あんたは初めてだろ」

あたり前だ。レーゲンスブルクへ初めて来たのだから。思えばかつてドイツで暮らした当時は子どもがまだ小さかった。休暇旅行も半分は子どもが喜ぶところを選んだ。遊園地へ行き動物園へ行った。今になって大人の楽しみをやつと実行しているようなものだ。

おじさんが注文を取りに来る。ビールの大きさ、ソーセージの本数、注文は細かく分かれている。五本もあれば充分である。暑いときに熱々のソーセージと酢キャベツ。あまり辛い辛子をたっぷりつけて食べる。テーブルの籠には堅いドイツの田舎パンが山盛り入っている。日除けがあるから助かったがドイツ人は太陽が平気である。五十人ほどがひしめき合って食するドイツの味。皿のソーセージをデジカメに収めていたら、ニコツとウインクされた。

「お二人で撮ってあげましょうか？」

おのぼりさん丸出しだ。

「これから何処へ行くの」

「船に乗ってヴァルハラへ行こうと思う。ドナウ川を遊覧するのでもいいだろう？」

ヴァルハラは十九世紀前半、ルートヴィヒ一世がドイツの偉人を奉るために建てたギリシャ風神殿だという。ここから十キロほど下った小高い丘の上にあるそうだ。

チケットを川辺の販売所で買って乗り込んだ。甲板は暑いのので船内で寛いだ。ここでもドイツ人は日差しなどお構いなし。甲板で飲み食いしながらおしゃべりを楽しんでいる。

ドナウは静かな川だ。緑豊かな川辺を眺めていると、山の方に白い柱が並ぶ大きな神殿が見えてきた。なんでこんなところにこんなものを、といった気がした。

岸辺から山道と三〇〇段はある階段を上って神殿に着く。振り返ると緑豊かな風景の中をゆったり流れるドナウ川が、西から東へと流れている。

神殿の中は大理石の柱に胸像がずらりと並び、一人ずつ名前を確かめっていると、知ったものも結構あった。国王、皇帝、音楽家、絵描き、学者、なかでも化学者を探す。

「リーヴィツヒがあったよ」

「ケクレもだ。ベッテンコッファーもあるね」

化学史に余念のない仲間がいたら喜んだであらうに思う。

神殿の一番奥に大理石で出来たルードヴィッヒ一世の大きな坐像がある。居並ぶ偉人達を謁見しているような王の坐像。この人はやはり自己顕示欲と収集癖の持ち主だと思ふ。

「建物といい、並べた偉人像といい、変わった王様だったのねえ」

「バイエルン王国の王になったとき構想したようだね。ドイツ人はかりでなくドイツ語を話す偉人の胸像を作らせたそうだよ。国威高揚を図ったのかもしれない。王さんが亡くなった後も胸像は増えていったそうだけど。ドイツ人中にはこの神殿をよく思わない者も多いそうだよ」

後でお会いしたホルベックさんも中を見たことはないと言っておられた。

「あれは遠くから見るとんだね」と。

ともあれ、此処から見るとナウ川は美しい。緑の畑と森が広く平坦で、川が悠悠と流れる。帰りも船に乗って戻る。レーゲンスブルクの大聖堂の尖塔が見え出した。石橋の手前が船着場。夕方の川辺をゆっくり歩き、石橋を渡って振り返ると、中世さながらの街並みと大聖堂が絵はがきのように佇んでいた。ドイツの夏の夜はいつまでも明るい。ぶらぶらと街中を歩いてホテルに戻ろうと裏通りを行くと、広場に出た。屋台まで出て賑やかだ。なんの集まりだろうと近づくとなにやら異様な雰囲気気づいた。若い男同士

が抱擁している。女性もいるけれど、男性か女性か区別の付かない人もいる。

「同性愛者の大会のようだよ」

太郎は急いで通り過ぎようと百子を促した。ローマ時代の雰囲気の色濃く残す街に集まっているこうした人たちが。カソリックとは相容れない人たちのようだけれど、古代から続く人間の性でもあろうと百子は思った。

夕食にもう一度街へ出かけた。レーゲンス風ソーセージを食べた後にはドイツ料理は食べたくない。今夜もまた中華レストランを捜した。中華の良さは味を裏切らないことと安価なことだ。

翌朝、二人は再び街を散策した。古い町は細い石畳の道が入り組み、ずいぶん古い壁が残っていたりする。大聖堂の裏手に出ると、白と黒の修道僧の服装の男たちが数人出てきた。教会の中から歌声もする。表に回ると、ちょうど日曜日のミサが始まる場所だった。

信者でない二人も入れてくれた。中は人でいっぱい、座れない人で溢れていた。二人も後ろに立ってミサが始まるのを待った。

程なくして派手な法衣を纏った司祭一行が中央の通路を通って祭壇近くに進んでいった。先ほどの男たちと同じ白黒の服装の僧たちも。続いて聖歌隊の少年たち、白と赤の

## 服装。

聖堂内に鳴り響く音楽と共にミサが始まった。司祭の説教の後、聖歌隊が高音の美しい声で讃美歌を歌った。大聖堂を埋め尽くす人々。祈りの中に沁み込む歌声。朗々と読み上げられる聖句。キリスト教、なかでもカトリック教会の仕掛けの素晴らしさに百子はいつも感心する。仏教との違いは、分かる言葉で説教されることだろうか。仏教の僧侶の服装も宗派によつてはなかなか派手である。權威を持たせる仕掛けだと言つては悪いだろうか。

建物と天上からの光と音楽と、神に仕える者とそこに従う者とは一体となつて祈る空間。信仰と共に連帯感も生れるだろう。民に、神への信仰という精神性をリードする司祭たちがナチスの時代には迫害され、多くダッハウの強制収容所に隔離され迫害されたのも頷けるではないか。

ミサの途中で二人は静かに聖堂を出た。時間がない。

レーゲンスブルクにはまだ見たい所が多い。二人は旧市街を歩き、王宮へと歩いた。王のためのビール醸造所がある。その奥が王宮だ。片隅の中庭で軽食を摂った。百子はやっぱケーキだ。マジパン入りのトルテ。おおきな一切れでお腹はいっぱいになる。ドイツのコーヒーマナナ美味い。太郎はコーヒードキ取つて、ホテルの朝食から持ち出した小さいパンを食べる。いつものことだ。ホテルの朝食はバイキングが多い。パンの種類もまた多く、菓子

パンもいろいろ並んでいる。その一つを頂戴してくるのだ。こうした息抜きが旅の疲れを癒してくれる。

宝物館に入つてみた。家具や陶器が並ぶ。馬車のコレクションの部屋もあった。ドイツばかりかヨーロッパの町を訪ねていると王宮や領主の館や砦や教会などに実にたくさん宝物が残っている。何度も戦争をしたところなのによく残っているものだ。

それにしても快晴続きには驚く。いっぺんに夏が来たのだろう。帰路。昼間の列車は期待に反して混んでいた。若い子が大勢乗り込んできた。わざとらしく大声で喋る娘たちを眺めていると、ドイツも問題を抱えているなあと感じる。彼女たちはどう見てもドイツ人ではない。黒髪に彫りの深い顔立ち、ドイツ語でまくし立てているものの、ドイツに受け入れられないもどかしさを感じさせた。

昔の規律正しいドイツ夫人は影を潜めているように見える。服装も行動も頑ななほどに厳格だったドイツ夫人に若い百子はどれほど緊張したところか。

ミュンヘン空港に戻り、デュッセルドルフへと移動した。フライト時間一時間半。

## 六

来る度に変貌する空港。巨大化してIT化されて、到着し

でも懐かしさは湧かない。デュッセルドルフはかつて家族で三年暮した町である。

目抜き通りケーニヒスアレーのどん詰まりにあるホテルに入ると、街に飛び出した。近くの所謂オフィス街へ出る。ここで仕事をした太郎にとってはいちばんの思い出の地だ。右手をズボンのポケットに突っ込んで、足早に前を歩く太郎の姿を見ていると、若い時も同じような姿で此処を歩いていたのだらう、と想像する。それにしても腰痛はどこに行ってしまったのかと百子は思う。ドイツに来て以来、シツプを貼ることもなく、毎日毎日歩き回っている。小走りに付いていく百子の方が足が痛い。商社のあつた大通り、太郎が事務所を作った裏通りと歩き回った。

百子はこの通りに面した太郎の事務所の窓から、寒い二月のカーニバルの山車の行列を見たことを思い出した。ドイツの冬は寒くて暗い。クリスマスが終ると、その暗さを乗り切る工夫のように、カーニバルが始まる。復活祭の前のキリスト教の行事。市を挙げて取り組むのだ。大人も子どもも仮装をしたり、集まってどんちゃん騒ぎをしたりと賑やかだ。

ライン川も凍りつくような寒い二月、沿道に繰り出して山車を楽しむ。山車の上には仮装した面々が笑顔を振りまきながら飾を投げる。それを拾う子供たち。

遠い昔を思い出していると、

「飯にしようか」と太郎はレストランを探し出した。日曜日のオフィス街は閑散として、食べられる場所が何処にあるのか？ レストランが少ないのも事実だが、こんなところの日本料理屋で大金を払いたくないという気持ちも大きい。かつてはよく利用した日本人クラブが移転していて、移転先が見つからない。結局つまらない中華料理屋で済ませた。

ホテルに戻って、夜のテレビを覗いていると、やはりワールドカップ南アフリカ大会だ。まだ予選中だがドイツも充分盛り上がっている。画面ではかの有名なオリバーカーン氏が解説していた。二〇〇二年の日韓合同開催のとき世界一と騒がれたドイツのゴールキーパーだ。泥臭いイカツイ風貌の持ち主だったと思うが、画面の彼は黒の背広に黒っぽいシャツを着て、なかなかの好男子である。

サッカー大国ドイツは子どもに至るまでサッカーファンが多い。男の子が二、三人集まるとボールを蹴っている。ジュニアースクールも充実していて、百子の孫もベルリンで暮らしていた当時、ジュニアースクールでサッカーを習った。芝のグラウンドやクラブハウスもある立派なスクールだった。全国にそうした施設が数多くあつて、鍛え抜かれた選手がブンデスリーガの選手になる。その中の先鋭がナショナルチームになってワールドカップを戦っているのだ。規律を重んじる組織力はチームワークに繋がりが、い

つも強豪と言われている。

テレビを観ながら「明日の予定は？」と聞くと、「午前中は空いてるよ」の返事。

「わ！ お買い物してもいいの？」

太郎との旅行ではまず買い物時間というものがない。行くとしたら本屋かCD屋だ。百子はデパートやスーパーへ行きたい。そんなもの日本でも買えると言われても、百子はドイツの思い出を買いたいのだ。

翌朝、カウフホッフというデパートへ行った。太郎とはそこで別行動。一時間半後ということにした。

百子は婦人服売り場へ急ぐ。丁度夏のバーゲン中だ。あれこれ物色して、グレイのジャケットを買った。百十九ユーロ。ユーロ安で約一万三千円。日本で買うより安価だ。それにヨーロッパは洋服の老家、デザインやカットティングが違ふのだ。これで二、三年余所行きには困らない。

自分の買い物はこれでよし。一階に下りて孫のための何かを物色する。もう高校生や中学生だ。玩具でもあるまい。文房具売り場でペンケースやボールペンを買った。ノートも買いたかったが、荷物が重くなるので止めた。百子はレターセットを必ず買う。印刷が綺麗だしデザインも大いっぱい。

ちらつと周りを見ると、財布売り場を物色している太郎

がいた。そういえば、安物だけど太郎もドイツへ来ると必ず財布を買っている。

「さあ、墓参りに行こう」

ホテルに戻って荷物を置き、ゲルダ夫人や皆さんへの土産を携えて市電に乗った。住んでいた当時の家主の家族である。お世話になった家主のベスタマン氏は七年前に亡くなっている。墓参りを先ずしてから家族を訪問する手筈になっていると言う。

太郎と百子にとって家主一家は、一軒家の一階と二階という形で暮らしたせい、その交流は親戚以上だった。ドイツの一軒家は複数の住いを持つものが多い。家主の家も三階建てで、地下室も含め新婚さんから独身者など十人以上で暮らしていた。

「どの辺にあるの」

一度行った所だけれど、その時は家主ヴェスタマン氏の長男ウーベがクルマで案内してくれた。ぼんやり付いていた百子にはさっぱり分からない。

「市電に乗って行けばすぐだよ。イターという墓地だ」

確かに市電に乗って、一つ乗り換えるとデュッセルドルフ大学の先にイターの墓地はあった。広大な森の中といった感じだ。

「花屋で花を買っていいこう」

日本の墓地と同じで人口近くに花屋が二軒あった。色とりどりの花、鉢植えもある。花を生ける水差しが一緒に売られていた。日本の墓のように花活けがないからだ。土葬である墓所は石の墓碑の前が一畳ほどの盛り地になっていて花を飾ったり蠟燭を灯したりしている。花屋には蠟燭も色々売られているが概して太い赤い色つきだ。一本で一週間は灯し続けるらしい。雨が降っても消えないようにガラスケースが付いているものもある。

長男のウーベがパソコンのメールで送ってくれた地図を片手に太郎はどんどん先に行く。

地図を読める男性を信じて百子も後に付いていった。広大な墓地は歩いても歩いても続いている。右に行ったり左に曲がったり、いつまでたっても辿り着かない。墓地の芝を芝刈り車で刈っているおじさんや沿道を掃除しているおじさんがいる。たまにお参りの人にも遭った。

「誰かに聞いたら？」

へとへとになってきた百子は太郎に声を掛けた。なにしろ一時間近く歩き回っているのだ。

「ちよっと方向を間違えただけだ。すぐそこだ。分かるって」

アルファベットと数字で区画が分かるようになっていて、確かに三十二地区だ。n o 7 7 なのだからすぐ分かるだろう。二人は墓の一つひとつを確かめながら、その区画を歩

き回った。でも分からない。同じところを何度も何度もぐるぐる回って、ついに百子は意を決し、芝刈りのおじさんが通りがかったので聞いてみた。

「名前は何？」 おじさんは問うた。

「フリッツ・ヴェスタマン」

おじさんはポケットからケイタイを出すと、事務所に聞いてくれた。

分かった、というふうには手招きし、近くの木陰に隠れるようにある細長い角柱で茶色の墓を指差しで教えてくれた。この道を何度も通っているのに気づかなかった。それにしてもだ。絶対に人さまに聞こえない太郎は何なのだ。

長年ドイツ語を勉強して「べらべら」のはずなのに。片言の百子のドイツ語が役立ったのだから皮肉である。

ヴェスタマン氏の墓は確かに細くて色合いも地味で、森の木々に吸い込まれそうなものだった。茶色の墓碑には上に赤い船の絵柄が彫られていて、名前も小さく彫られている。生誕の日付と亡くなった日付が並んでいた。

太郎は持ってきた黄色の菊の花を供え、祈った。日本らしいからと選んだ花だ。墓碑の前は百合の花と地植えのベゴニアやゼラニウムで飾られ、ガラス製の蠟燭立てに炎が灯っていた。

「あんたもお参りしたら。ヴェスタマンにはよく可愛がってもらっただろう」

百子も深く頭を下げた。いい人だったと思う。二人の小さい娘を連れて、右往左往する百子をよく助けてくれた。

ヨーロッパ駐在員だった太郎は月の半分は出張で家を留守にしていたのだ。奥さんのゲルダ夫人と一緒に不慣れな日本人家族を温かく見守ってくれたのだ。

迷ったためにすっかり時間を喰ってしまった。ゲルダ夫人が待つ家へ急がねばならない。約束の時間には間に合いそうにないので、太郎は電話を掛けた。こういうときはさっさと行動して得意のドイツ語が役に立つ。

ゲルダさんは可愛い孫娘と待っていてくれた。十一歳の金髪の女の子。長女ウルリケの娘だ。

「ウルリケも会いたがっているのだけれど、下の娘が蜂に刺されたので病院へ連れていっているのよ。まあ、とにかくお茶にしましょう」

ゲルダさんは上機嫌で二人を招き入れた。今回は二年振りの再会である。いつものテーブルにお茶の準備がなされていた。カップ&ソーサー、ケーキ皿、三種類のケーキ、生クリーム。シンブルでいて三種類のケーキが華やかで美味しそうだ。

「昨日まで頭痛で寝込んでいたのだけど、今日は気分がいいわ」とゲルダさんはいそいそコーヒを淹れたり、孫娘に牛乳を出したりと忙しげにサービスしてくれた。

「お墓を捜してちよっと迷いました」

（ちよっとどころじゃないわよ）

「墓碑の上に船の絵柄があるのですね」

「そうなのよ。主人はハンブルクで生れて船が好きだったから」

「もう七年になりますね」

「ええ、お墓へはよく行つてますよ。蠟燭は灯すと一週間は灯っているので、消える頃にはまた行くのです」

ヴェスタマン氏は一九三一年生れである。百子がお世話になった頃はまだ三七、八だったのだ。百子も若かったが、当時の家主さんはごく頼もしくて働き者で、陽気で親切だった。一家の主として悠然として立派だった。

ゲルダさんは太郎と同じ年、当時三十三歳。いま振り返るとまだ三十代でよく世話をしてくれたものだと思心するし頭が下がる。

高齢になった者同士、話題は健康のことになる。ヴェスタマン氏が亡くなつてもう七年になる。夫人はやはり孤独なのだ。種々の身体の不具合が悩みの種になっているようで、近々ある講演会に行くと言つて、案内状を見せてくれた。なんでも健康の中心は背骨にあると主張している人の話らしく、なにか宗教がかった臭いもした。参加費百ユーロ。約一万円強だ。日本もドイツも世の中は変わらないのだ。

夕方になつてウルリケが下の娘と帰ってきた。八歳の金

髪の娘。百子はなにか不思議な気がした。かつてここで暮らしていた頃、ウルリケは七歳で、帰国した時は十歳だった。ウルリケの二人の娘は当時の彼女の三年間を物語る。そつくりではないか。

見とれていると、ゲルダさんが

「この方たちは遠い日本から十二時間もかかってドイツにきたのよ」

と教えた。すると、やんちゃな下の子はすかさず、

「私だってこの間、夏のキャンプで保養所までバスで十三時間かかったわ」

早口に喋り捲るその調子がかつてのウルリケそのものだ。毎日のように二階のわが家へやってきた。

「二階でよく食事をしたねえ」と彼女は笑った。おにぎりが珍しく、よく食べていたのだ。四十年という月日を経て、お茶を楽しめる異国の友がいる、百子は人生は楽しいと感じた。

ウルリケの長女が突然立ち上がって本棚から一冊の本を持ってきた。なんと、百子が二〇〇二年に初めて出版した「星のとき」という本だ。百子がドイツで暮らした当時のことを書きとめた一冊で、家主一家の写真も扉に盛り込んだ。それにしてもゲルダ夫人の孫がその本を持ち出してきたことに百子は心底驚いた。日本語の本は読めないだろう。写真が印象深かったに違いない。

庭に出て皆で写真を撮った。母娘三代に囲まれて太郎と百子は幸せだった。

「もうこれでお別れ、という『さよなら』は言わないで、『また会いましょう』」

太郎は手を差し出して言った。

ゲルダさんも「そうよ。『また会いましょう』」

百子はウルリケと抱き合った。本当に可愛い娘だった。五十歳に届く年齢になっても、やっぱり可愛い。

「またね」

市電に乗ってホテルへの道中、太郎と百子はデュッセルドルフの街の風景に見入っていた。商業都市であるこの街は決して美しいものではない。ドイツの街特有の美しさは田舎の町にある。でも建物の高さが同じで、緑は豊かである。石畳の道を市電が走る。街角の店に並ぶ野菜や果物。百子は若かった頃の暮らしを思い出していた。幼い娘二人を連れてよく電車に乗った。乳母車に次女を乗せている百子をドイツの男性はまったく自然体で助けてくれた。街角に四十年の歳月を感じていた。

## 七

ドイツで仕事をした太郎が、四十年後になる今に至るま

で交友のあるドイツ人はホルベックさんだけだ。太郎の会社と関わり、ほどなく独立したのだが、太郎とは気が合うと見えて、太郎帰国後も交流は続き、今や「du」の関係である。

ドイツ語では大人同士では相手のことは「Sie」を使う。余程親しくなった時に「du」を使うのだ。太郎より六歳年下のホルベックさんだが奥さんは彼より年上で、丁度私と同じ年。最近ではドイツへ行くと必ず四人で食事をする。

彼はデュッセルドルフに程近いエッセンに住んでいる。エッセン市と言えばクルップといわれるほど、クルップグループで栄えた町だ。長い歴史を持つ重工業企業で、鉄鋼製品を手がけ、車輪の製造で鉄道の発達とともに大企業に発展した。その後は世界大戦時、武器の生産、それは鋼鉄製の銃、大砲であり、また戦車、軍用トラックなどの兵器の量産でその富を築き上げた。ルール地方は石炭や鋼鉄の宝庫であり、クルップは国家的事業に乗って巨万の富を生み出したのだ。百子の父親は日本の重機械工業の技術者だったところから、戦後この企業との技術提携に尽力し貢献した一人なのだ。まだ海外渡航など極少数の企業にしか許されていなかった昭和五十年代に、住友という後ろ盾を得てこうした仕事で父親はドイツやアメリカへよく出張していた。

その日、朝早くにホルベックさんはホテルまでクルマで迎えに来てくれた。ドイツ人としても大きい人で、彼と並ぶと太郎が急に小さく見える。さっそくエッセンへと走り出した。三十分位だ。以前にも訪ねたことがあり、その時はホルベックさんの家を訪問したし、クルップ一族の屋敷「ヴィラ・ヒューゲル」にも行った。丘の上の屋敷は広大な森に囲まれ、王侯貴族の館のようであった。クルップの勢いそのもの。百子の父親も興奮して話したことがある。

今日の彼はクルップが築いた社宅むらと高齢者用の住宅むらを案内してくれた。かなりの戸数が並ぶ社宅むらは大小さまざまの家が整然と並び、家の前には花が咲き、街路樹も生い茂って豊かな佇まいである。百子は子どもの頃住んだ愛媛県の新居浜の社宅を思い出して、「階級によって家の場所と大きさが違うのでしょうか」と聞いてみた。

「そうですね。どこに住んでいるかで職場の階級が分かります。クルップの偉いところは、退職者向けの住宅も作ったことです。主が亡くなっても未亡人はそこで暮せたんですよ」

ついでに老人施設も作ったようだ。

「ヴィラ・ヒューゲルはいまもクルップの持ち物でしょうか？」

「グループで持ちこたえているようです」

百子は急に（ここを案内しているのはお父さんだ）と思つた。百子の父親は中国から引き揚げ、企業に復職して以後、企業の技術発展に尽くした人だ。英語を学びなおし、世界に誇る重工業の技術導入に尽力した。同じ敗戦国であるドイツが戦後どのように国の再建をしているのか興味深かつたことだろう。ルール工業地帯を見、エッセンを見て心躍らせたのではないだろうか。

次にホルベックさんが案内したのは正にルール工業地帯の心臓部、石炭発掘地帯にあるツォルフエライン炭鉱跡だつた。かつての発掘現場がリアルに残され、内部まで公開している世界遺産だ。百子は想像を絶する大きさ深さに驚いたが、もっと驚いたのはそのシステムの合理性、整然とした佇まい。日本の炭鉱を見たことはないが、炭鉱といえはなにか暗い印象があつた。ここは大企業の雰囲気を持つとてつもなく大きな工場である。炭鉱採掘は一八三四年からで一九八六年まで行われていた。

見学後、近くのレストランで食事をしたが、そこも炭鉱の施設の一部だ。中は黒を基調にしたレイアウトの高級レストランで、テーブルにローソクを灯し、上質のワインを出し、料理もなかなか洒落ていた。

太郎が言う「最後のドイツ旅行」でドイツの心臓部とい

われるルール地方を見ることが出来て百子は満足だつた。機械屋の子どものだとしみじみ思つた。

ホルベックさんは「もう一つ見学しましょう」とオーバーハウゼンにあるガソメーター（ガスタンク）に案内した。いまは展示場として使われており、丁度惑星の展示が行われているという。

駐車場から大きく見上げる石炭ガスのタンクは高さ百十七メートル、直径六十八メートル。一九八八年まで鉄工所にガスを供給していた産業遺産を見事に展示施設へと転用している。

中に入ると中央に大きな月が浮かんでいた。浮かんでいるように上からつているのだ。灰色の月にはクレイターがいくつもあつてリアルである。エレベーターで上がるに連れて、ガラス窓から月の様子が分かるようになってくる。暗い展示場の階段を上がるとき、ホルベックさんは実に自然体で百子の手を引いた。太郎はさつさと先を行く。日本の男性との違いである。百子は男性に手を引いてもらったことなどもう忘れてしまったほどない。でも、ホルベックさんの差し出した柔らかな手に戸惑いもなく手を重ねた。胸はどきどきしなかつた。暗い階段を安心して上がった。

屋上に上がるとルール地方一帯が見渡せた。デュイスブルク、エッセン、ドルトムント、カナル（運河）に船が行き交う。森も多く緑豊かである。小さい山はボタ山だと

いう。かつてはドイツの心臓部であったが、石炭産業の衰退とともにその産業も推移しているという。百子たちが今日見たものは、すでに産業としては終ってしまった遺産であった。

屋上はさすがに風が強く、空は青く晴れているのにとっても寒かった。

階下の惑星の展示や研究の歴史などよく分からないままに見て周り、明るい外に出ると百子はちよつと疲れを覚えた。

夜、デュッセルドルフのアルトシュタットにある魚専門店で夕食となった。ホルベックさん、奥さんのエリカさん、太郎と百子。この四人組でいつもこの店に来る。店頭には大きな生簀があつて、北海の大きな魚がウヨウヨしている。エリカさんはドイツ婦人にしても大きい人だ。背が高いだけでかなり太つてもいる。百子はエリカさんに抱きすくめられると、すつぽり包み込まれたような気分になる。ハグをするという習慣は人肌を感じて親しみが増すものだ。百子はエリカさんと腕を組んで歩いた。まったく自然に。

店に入ると、まず、白ワインと生牡蠣で乾杯。でもホルベックさんは飲めない。クルマだからだ。食後、ハンガリーから遣つてくる孫を迎えにケルンまで行くと言う。それ

でエリカさんは昼間準備に忙しかったのだ。

四人はそれぞれ食べたい魚を注文した。ホルベックさんはシイラ、エリカさんはスズキ、太郎は上質の白身魚のダール、百子はブイヤベース。胃の弱い百子にはスープが一番いい。

こうした付き合いをもう何年もやってきたが、（これが最後）という気持も覗く。お互いに白髪の年までよく頑張ってきたものだ、そんな気持になつていた。

「最近、耳が遠くなつて……」とホルベックさんは言う。太郎もそうだ。これから先はお互いに弱る一方だろう。元気に過ごせてもう一度会えたら幸せである。持参したお土産と交換のように太郎はこの地方の歴史書を、百子はテール用のガラス製蠟燭立てを買った。日本に帰つてドイツを偲ぶいい記念品になる。

## 八

今日はボンへ行くという。

「なにに？」

「墓参りだ」

ドイツに来て墓参りをよくするものだ。友人知人の墓参りならともかく、高名化学者のお墓を訪ねるのだ。

「ミュンヘンでもお参りしてたじゃないの。今度は誰のお

墓？」

「ケクレだよ」

ドイツ鉄道に乗ってケルンへ向かう。その先がボンだ。ボンはドイツが東西に分断されていた当時は西ドイツの首都だった。元々はベートーヴェンを生んだ静かな大学町なのだ。

ボンに着くとタクシーに乗って、墓地のあるブッテンスドルフへ向かう。三十分ほど走って門の前で降りると大きな看板があった。ここに墓のある高名な人の名前がずらりと記されている。たくさんある。ボンで亡くなった人が多いのだ。

「ケクレ、ケクレ、あった、あった」

記号で記された場所へ急いだ。今度はすんなりと分かった。というかケクレの墓は見事なほど大きく立派だったのだ。大きな茶色の大理石の墓石には胸像も彫られていて、前面には花が植えられ綺麗に飾られていた。

「お墓参り、これで何回目？ 高名な化学者のお墓参りって意味あるの？」

百子には「化学史の旅」の一環としての墓参りがなにか附に落ちない。お墓に参って思ひでみたとして化学史の研究に役立つ訳はなからうと。ところが後日、百子は新聞紙上で「墓マイラー」という言葉を目にして考えが変わった。

自称「墓マイラー」を名乗るカジボン・マルコ・残月さんは世界五十カ国千四百人以上もの芸術家や歴史上の人物の墓に参りインターネットで紹介しているというのだ。墓参りは「巡礼」だと言う。「世界は美にあふれている」「人生は生きるに値する」と、作品や生きる姿勢を通して気づかせてくれた恩人たちに「ありがとう。あなたがいたから今の僕がいる」と伝えるのが目的だと言う。

墓も知らないで故人を語るなかれ、ということなのだ。太郎の同窓生仲間たちが、行く先々でドイツの高名な化学者の墓に参ることは、大学で化学を専攻し、ドイツの化学の基礎があつて日本の化学が進歩したという「あなた方がいたから今の我々がいる」という気持の表れであつたのだ。なるほどと百子は納得した。

ボン大学化学校舎の前にはケクレの大きな銅像が立っていた。試験官を持つて毅然と立つ姿は立派で庄巻である。首に白いマフラーを巻いていた。誰かのイタズラだろう。

ボンにはベートーヴェンハウスや歴史博物館もあるというが、二人は地下鉄に乗ってライン川に出た。右手前方に七つの円錐形の山々が見える。ジーベンゲビルゲと呼ばれるドイツのぶどう栽培の北限である。有名なワイン「ドラス・ヘンブルート」の産地だという。川を行き交う船を眺めながら手持ちのパンをかじり山を眺めた。大きなトラックが来て女性の庭師が並木の剪定をやりだした。バスや市電の

運転手にも女性が多い。遅い女性姿である。

デュッセルドルフへの帰路、ケルンに立ち寄ってドームをもう一度見学した。駅前にあるこの大聖堂は建造にかかった年数が六百年とも七百年とも言われるが、遠くから見ないとその全貌がつかめないほど大きい。中に入るとぐつと暗い。目が慣れてくると、ステンドグラスの輝きが目に沁みる。赤や青の色調の素晴らしさは何度見ても見飽きない。ゴシックの高い柱と柱の間に幾枚も続くそれらは、聖書の物語を語っている。薔薇窓はあまりに高く遠い。礼拝堂に灯る蠟燭の炎。祈る人々。ドームはいつも解放されている。

大聖堂の前に大きなカフェ・テラスがある。広場にたくさんテーブルが出されているのだ。二人で座ってお茶にした。こうしたテラスでのお茶はヨーロッパ旅行の楽しみでもある。外だからといって紙コップにインスタントではない。店内と同じものが出される。それは種類の多いケーキであり、本格的なコーヒーである。カップも皿も優雅なもの。百子はケーキを注文した。ウエイトレスは店内のケーキから選べという。中へ付いていった。ケースの中のケーキは色とりどり。季節柄果物のケーキが多い。さくらんぼ、アンズ、イチゴ、ブルーベリー、木苺、ラズベリー、リンゴ。百子は迷い迷ってアンズのトルテにした。

こんなに美味しくケーキを楽しめる時間を百子は嬉しい

と思う。見上げると高い聖堂の壁面の先に青空が覗く。壁は長い年月と戦争の傷跡を残し、何度も修復を繰り返している。ずつと前に五百段もの階段を上って展望台まで昇ったわねえ」

「五百段もよく上ったよ」

いまや太郎も百子も腰痛もちだ。膝も痛い。どの街に來ても高いところへ上って街を俯瞰していたけれど、もう駄目だ。下から眺めながらお茶を飲むしかない。聖堂の前のカフェでお茶を飲んだのも百子には初めてなのだ。

ケルンからデュッセルドルフまでは鉄道で三十分だ。外からデュッセルドルフに帰ってくると、なんだか昔住んでいた当時の気分になる。わが街はデュッセルドルフ！

外国人労働者でいつも賑わっている駅前からブラブラ歩いて、いつも立ち寄るデパートに入った。孫の土産にFIFA南アフリカ大会のロゴの付いたミニサッカーボールなど買って、階上のレストランへ寄った。時間割引で半額というのに釣られて庶民的ドイツ家庭料理で夕食とした。生クリームを使って煮込んだ豚肉、じやがいものバター焼き、白身魚のフライ、酢キャベツなど、今夜は安上がりだ。この地方特産のアルト・ビア（黒ビール）で乾杯した。ふと見ると瓶に抽選券が付いている。開けると「当たり！」だ。太郎は喜んでもう一本買いに行った。ところがそれは炭酸

入りのシロモノ！ ビールであつてビールでない。ご婦人向きの物かも知れないが、太郎は憮然とした表情で残りのビールを飲んだ。

「もう後、一日よ。何処へ行くの？」

「ドイツ発祥の地と言われるアーヘンへ行こうと思うのだけれどどうだ？ 昔行つたっけ？」

「クルマで行つたのだけど、日曜日、お友だちと遊んでいたと言う子を無理矢理連れて行つたから、機嫌が悪くて困つたんじゃないか？」

「そんなこともあつたかなあ」

「アーヘンへ行くのは賛成よ。子ども連れていつもゆつくり観光できなかったもの」

「じゃあ決まりだ」

珍しく意見が一致した。

## 九

デュッセルドルフからアーヘンまで鉄道で一時間半、ベルギー国境の方角、ドイツで一番西に位置する町だ。ここはもともと紀元前からローマ人たちの温泉場として使われてきた。その後、ゲルマン民族の一派フランク族が移動してきて定住し、アーハという地名をつけたという。アーハは水という意味で、いまでも温泉保養地として有名だ。

八世紀、ゲルマン民族の大移動以来、西ヨーロッパは混沌の中にあつた。そこに安定をもたらしたのがカールである。カールはフランク王国を打ちたて、その都をアーヘンに定めた。生涯の殆どを戦乱の地で送つた王は、温泉の出るこの地が大変気に入り、晩年をここで過ごしたという。

皇帝としての在位は八〇〇年からの十四年足らずであるが、九世紀初頭には礼拝堂として八角形の丸屋根を持つ聖堂を建てさせた。聖堂はその後次々と増築されたが、基本は宮殿教会である。カール大帝はここに葬られているし、大帝が座つたという大理石の椅子はいまなおそのままの姿で教会の二階に残る。歴代の神聖ローマ帝国（ドイツ）の皇帝は戴冠式をこの教会で行い、その椅子に座つたという。それゆえにアーヘンはドイツ発祥の地と言われるのだ。

駅から旧市街を歩いて十五分ほどで大聖堂に着いた。ロマネスク様式にビザンティン様式、ゴシック様式が混在する不思議な聖堂である。薄暗い中に入ろうとすると、写真撮りたい人は二ユーロ支払うようにと注意された。太郎だけ撮ることにしたら、印の黄色いリボンをつけてくれた。教会でこうしたお金を取られたのは初めてである。

入口近くにローマ時代の遺物が展示されていた。更に奥に入ると、黒と金の装飾で八角形のシャンデリアと丸天井がある。カール大帝の立てた聖堂だ。反対側は増築されたもので、高い柱とステンドグラスが明るさをもたらしてい

る。赤とブルーのステンドは光を受けて静かな雰囲気だ。

大理石の椅子があるという二階へは観光客は入れてもらえなかった。絵はがきの写真で見ると、五段ほどの階段の上に作られた椅子で、装飾もなくシンプルなものである。

カール大帝の有名な金の胸像や王冠などが展示されている宝物館を覗いた後、前の広場で休憩した。例によってお茶だけ頼み、ホテルから持ち出した菓子パンをかじった。屋外のテーブルに座って休む楽しさ、ドイツ旅行の醍醐味だ。市庁舎やその前広場のマーケットを覗きながらブラブラ歩いた。野菜や果物、白アスパラの山、チーズやハム類に混じって花がたくさん売られている。ベルギー、オランダに近い土地だからだ。芍薬がたくさんあった。市庁舎の裏のテラスにも色とりどりの花が植えられていて、古い街を飾っていた。

近くの公園では憩う人々が太陽に当たり、さして大きなビルもない旧市街を歩いていると、長閑なドイツの良さが身に沁みる。大学へ通う若者の自転車姿もまたいいものである。

鉄道でデュッセルドルフへ帰る車中で、中国人らしき若者がケイタイで喋っていたが、ドイツ語の流暢なことに驚いた。ドイツには中国人が多くなった。かつては東洋人といえは日本人だったが、いまは中国人か韓国人である。そして両者ともに語学力がある。

「日本は負けているなあ」と感じるが多くなった。

一度ホテルに戻り、最後の夕食に出かけた。その前に二人はライン川を見に行った。

デュッセルドルフを流れるラインは川幅が広く堂々としている。そこに架かる橋も何本かあって、行き交う船も多い。ライン河畔は公園になっていたり緑地帯になっていたりでのんびりした風景が広がっている。

地下鉄に乗って北側のラインパークへ行き、そこから旧市街へと歩いた。堤防の壁にもたれてのんびり川を眺めた。百子は川のある風景に惹かれる。いつもとうとうと流れている川を見ていると、生きてきた年月を思う。百子はそつと太郎の横顔を見た。太郎も遠くを眺める目をしていて、若い時は頑張ったよね。銀行でもなく商社でもない一化学会社のヨーロッパ初代駐在員として赴任して太郎は三年半、百子は三年、異国暮らしはきつかったよね。百子は寂しいことがよくあったけど、太郎に守られていたのだと思う。太郎は孤軍奮闘したのだ。外地で一人で仕事をする。大変だったでしょう。家族を迎えても、それは語学力のない妻と幼児二人。助けにもならなかったよね。それだけに此処で暮した年月は宝物になったのだわ。百子はそつと太郎の手に自分の手を重ねた。